

南日本新聞 R2.5.11付

祝おめでとう

4月の若い目賞

大川内中学校(出水市)
西伊敷小学校(鹿児島市)
賞は投稿や採用の数ではなく、作文の内容や取り組みの継続性などを、南日本新聞社読者センターのひろば担当が総合的に判断しました。「若い目特集」で月1回発表します。

弟を成長させる

西伊敷小5年

上原康士郎

ぼくが5年生でがんばりたいことは弟の世話です。学校が休みの間に2人です番していたとき、弟は「ひま。ゲームしたい。おやつを食べたい」しか言わなかったの、ちゃんと小学生になれるのかなと思ったからです。

弟が小学1年生になって、一緒に学校に歩いて行って

います。しかし、と中で道ばたにすわりこんで、「もう歩けない」とふきげんになってしまうことがあります。ぼくは弟に「たくさんご飯を食べて、体力をつけなさい」と言いました。しかし、まだおやつばかり食べています。

これから、ぼくが5年生までで学んだことを弟にたくさん教えて、弟を成長させていきたいです。

(鹿児島市)

南日本新聞

ひろば

R2.5.9

セピア色にあせた大事な背広

無職 村岡 豊治(91) 島人それぞれの人生が始まる。私には郷土でほそほそ暮らす農家の、9人きょうだいの3男に生まれ、長男は戦死し、次男は上京したので3男の私が跡を継ぐことになった。義務教育を終えると島に残る者、離れる者と、

幸いその年は米が豊作だった。そこで両親が留

守だったある日、「これ幸い」と、もみ米5俵を換金した。欲しかった背広を買うため。だが世の中そう甘くなかった。次の日、母が「もみ米が5俵足りない。知らないうか」と言う。厳しいおやじにばれたらどうなるか、容易に想像できた。母の鼓動は激しくなり、すべて母に白状した。だが母はそれから、その話を一度もしなかった。あれから七十数年、母の愛が込められた背広はセピア色になり、今も古びたたんすに大事にしまっている。

母の目が来るたび胸が熱くなる。「おっかあ、ありがと」。年老いて涙は枯れたけれど、母の深い愛は夢にも忘れず、私は今もこの島で生きています。(薩摩川内市)

断ち切られ分かる日常の大切さ

中学校教員 小野山 雅子

(静岡県 54)

学年主任として3年間受け持った生徒たちの最後の年は、2月で終わった。学年委員の生徒たちと、お別れ遠足や卒業式の日に担任へのサプライズで歌う合唱の計画を立て、「最後の1カ月頑張ろうね」と励まし合った翌日、「当

たり前の日々」が終わった。帰りの車の中で私は泣いた。小規模校なので大半の生徒が9年間、時には11年間一緒だった。別の時までもあれもしよう、これもしようと思えていた。それが一瞬で消えたつらさ。そして、卒業式の前日、2時間だけ生徒が登校した時のうれしさ、日常が2

時間だけ戻ったうれしさ。その中で気づいたことがある。今回の休校は前日に決定したが、災害や戦争は予告もなくいきなりやって来て、普通の生活が断ち切られるのだ。頭では理解はしていたが、今回その恐ろしさに初めて気づいた。日常のありがたみを感じた、休校だった。今春、新しい学校に赴任したが、生徒にはまだ会えていない。いつ、日常は戻るのだろうか。

朝日新聞